



炭鉱都市撫順から見た満鉄の住宅地計画

日時：2021年6月19日（土）16:00～18:00

場所：Zoom会議

包 慕萍（大和大学理工学部建築学専攻 准教授）

1. 撫順における満鉄附属地の市街地と炭坑町

撫順は中国の清朝の皇陵の永陵と福陵（現世界遺産）の間に位置し、風水を破壊させないために石炭の採掘は禁止され、皇陵建築を修理する建材を生産する目的で、撫順に煉瓦や瓦の窯工場が設けられた。城郭内の役所や民家は煉瓦壁と木軸組の混構造を使用しており、以降の満鉄建築がこのような満洲在地の建築技術を基に混構造を採用することになった。城郭内外の住民は満洲族が主であるため、民家の形式も漢族の建物と異なり、藁葺屋根の院子式になっていた。

撫順炭坑は1905年の日露戦争後から日本野戦鉄道提理部の支配下に置かれ、2年後に満鉄会社に継承されたのである。これを機に、皇陵禁地や農業生産地であった一地方県城の撫順は炭鉱都市としての性格が強められ、1920年代になると発電所や製油工場など近代のかつ大規模な工場が創設され、旧満洲において奉天（現瀋陽）に次ぐ、二番目の工業都市に成長した。

本論では、都心にある市街地と炭坑附近に建設された町をあわせて炭鉱都市と呼ぶ。満鉄撫順炭鉱では、満鉄の一元管理下に置かれる市街地と「炭坑町」の二種類の町が建設された（図1）。前者は満洲において他の満鉄

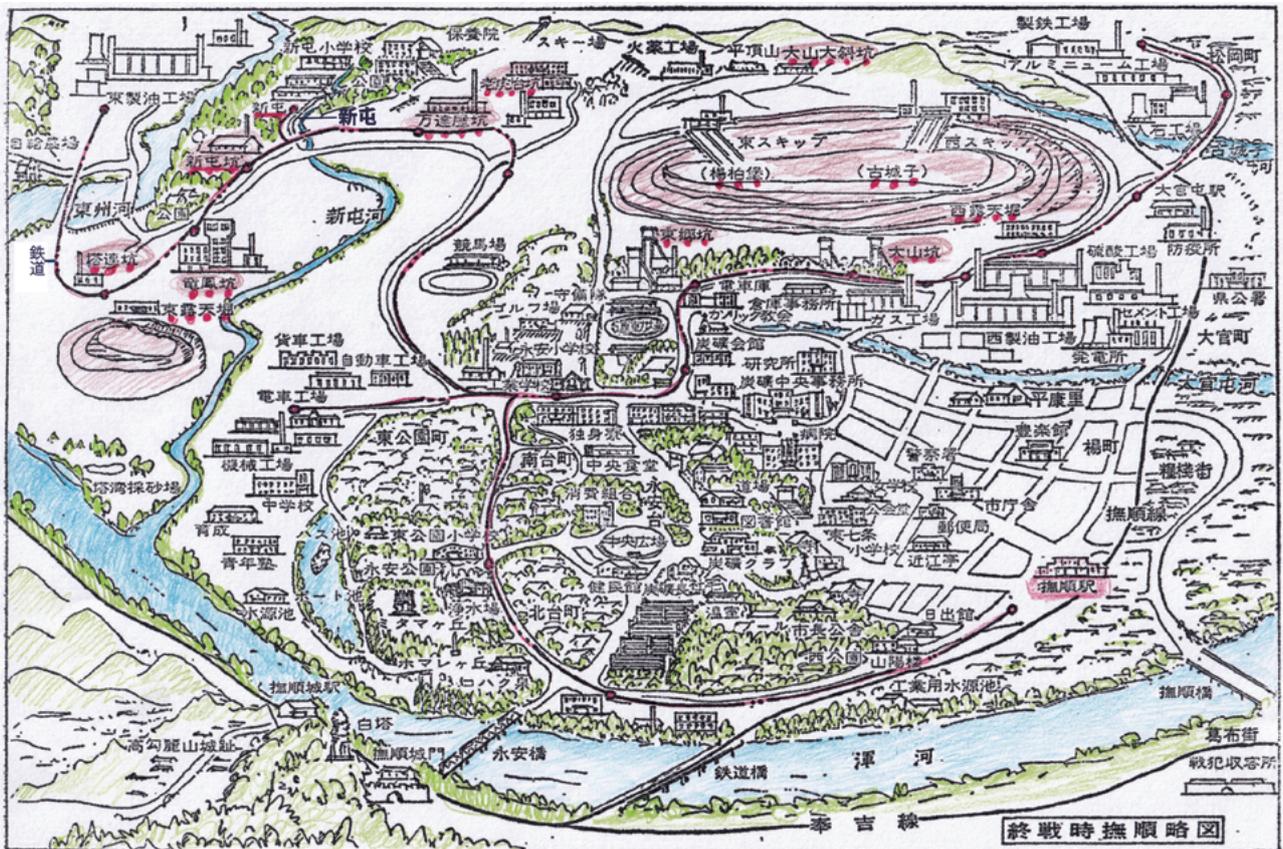


図1 撫順都市域略図（1945年）

出典：『撫順炭礦終戦の記』（満鉄東京撫順会編、1973年）のP.55の図をもとに、筆者が加筆、着色した。

附属地にも見られるように、駅を中心に計画される市街地である。千金寨や永安台である。後者は、市街地から離れて、作業の利便性から炭坑の近くに造られた町で、本文では市街地と区別して炭坑町と称す。市街地の周囲に多数の炭坑町が分散するような都市構造は、旧満洲の鉱山・工業都市である本溪や鞍山にも見られ、撫順はその典型と言える。

満鉄附属地の市街地は、まず千金寨で計画、建設され、1924年頃には、戸数は6,000余戸、人口は47,200人を数えるまでに発展したのである¹。その都市計画及び建設については、越沢明、社宅や公共施設については、池上重康らの研究によって明らかにされている²。

1919年末に大露天掘り計画が決定され、千金寨がその露天掘り区域内にあるため、翌年に全市街地を永安台へ移転することになった。1924年から1928年までの間に、満鉄附属地の市街地は千金寨から永安台への移転がほぼ完了した³。永安台の新市街地計画は満鉄が取り組んだ最後の都市計画で、その後、満洲国が引き継いだ。言わば満鉄系都市計画の集大成である。詳細は前掲の越沢明の論文を参照されたい。

本論では、先行研究になかった撫順の炭坑町を取り上げたい。

2. 「炭坑町」の建設とその空間構成

2-1 撫順の各炭坑町の概況

満鉄の炭坑経営初期、即ち1919年の大露天掘り計画以前には、都市西部の五つの炭坑を主に開発した。

1919年に大露天掘り計画がその後の炭坑開発の方針として定められ、新市街区予定地の永安台の建設が始まり、社宅の管理が本社から撫順炭鉱庶務課に移されるなど、撫順の都市発展にとって画期的な変化が訪れた。この時期から炭坑の開発が東部に及んで、1918年に龍鳳坑、新屯坑を新たに開掘し、1920年に搭連坑を買収した。同時に、西部炭坑の規模をますます拡大させた。

各炭坑の近くには何れも炭坑町が建設された。石炭を運搬するため、各炭坑町まで鉄道が敷かれて、駅舎が設けられ、永安台市街地と電車で連絡されていた。各炭坑町には、採炭事務所、機械や木工、修理のための工場、倉庫など管理と生産に関連する施設、日本人と中国人社宅、診療所や浴場、消費組合、クラブ、中国人共同食堂などが建設された。例えば西部に位置し、古くからある大山坑町では煉瓦造社宅21棟4,837㎡が建設された。その内訳は甲種社宅3棟5戸、乙種社宅2棟8戸、丙種社宅3棟14戸、下級社員が使用する戊種社宅11棟69戸であった。この他に、木造クラブ1棟208㎡、煉瓦造合宿舎2棟、計881㎡、煉瓦造共同浴場1棟117㎡、煉瓦造華工社宅60棟、計6,833㎡、華工浴場3棟、食堂、炊事場、売店各1棟、計1,276㎡が建設された⁴。1930年代になると、炭坑町の人口が増えるにつれ、警察署、郵便局、学校、病院、公園まで建設され

るようになった。

以上の各機能の建物や施設は、さらに二つに分けてゾーニングされた。一つは日本人職員が主に住む社宅街で、もう一つは炭坑の近くに設けられる中国人労働者⁵居住区である。ここでの中国人労働者は、坑夫のことであるが、撫順は植民地都市であったため、採炭労働者は中国人に限られたのである。

2-2 炭坑町である新屯の建設

新屯坑は清朝期から元々あった新屯村落の南約700mの山麓北面に位置し、1918年に斜坑が開掘され、翌年から出炭した。

1920年代は、撫順にとって大建設の時代である。満鉄の市街地が千金寨から永安台へ移転する大事業が実行されるほか、炭坑も従来の大山坑や東郷坑より遠い東へ新設され、新屯坑もその中の一つである。1917年に満鉄が新屯坑用地、龍鳳坑用地及び従来の万達屋坑を終点とした電気鉄道を搭連炭坑まで延長するに要する鉄道用地が測量された⁶。翌年の1918年に新屯坑のための作業用地と社宅敷地として合計46,927畝(約465ha)の土地を買収した⁷。

まず、新屯坑を中心に、中国人坑夫たちの居住地が建設され、共同食堂や売店、クラブが併設された⁸。それより、南側の谷地に日本人町として新住宅地が計画され、建設された。この新しい新屯町は、その北は新屯村落に面し、西は万達屋川により万達屋坑と境に、東は新屯川を隔てて、龍鳳坑と隣接する(図2)。旧新屯村落は、後年の東露天掘りの開発によって無くなった。したがって、現在の新屯市街地はこの日本人町が始まりである。

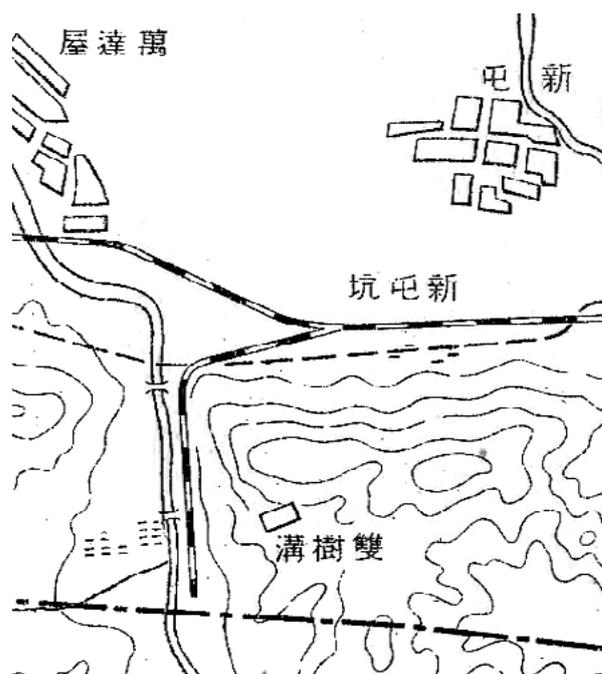


図2 1926年頃の新屯(参考文献2附図)



新屯坑の創建初期の主要附属建物、煉瓦造の日本人社宅は13棟あり、合計面積は3,222㎡である。その内訳は乙種社宅1棟8戸、丙種社宅4棟20戸、丁種社宅7棟48戸、合宿舎1戸である。他に煉瓦造の華工社宅が25棟あり、合計面積は3,583㎡である⁹。

以上のデータと図2を照合してみて、日本人社宅の建設地が確認できた。図2では、電車の路線は谷地まで引き込まれたことが確認でき、また橋が架けられた万達屋川の西岸に17棟の建物が並列に配置されていたことが認められる。

2012年の現地調査では、電車駅の跡地が確認できた。駅と橋の位置関係から検証すれば、新屯建設初期の日本人社宅地の立地は、現在の新屯学校の南側であり、新屯西街の一番北側に位置することと判断できる(図4を参照)。

新屯坑の出炭量は初年度の2万トンから、翌年1920年に約6万トンに増加し、1922年に前年の2倍の16万トン、1924年に約44万トンに激増し、以後は44万トン前後で推移したことから¹⁰、1922-1924年は新屯人口の増加期と推測される。これと共に、満鉄社宅地も拡大された。1928年に撫順新屯尋常小学校が創建された¹¹。新屯育ちの日本人の回想録によれば¹²、中に幼稚園も併設された。配給所や組合と呼ばれた食品、日用品などの満鉄直営の雑貨販売所以外にあった商店は、中国人経営の肉屋一軒だけであった。

満鉄の社宅地が初期の立地より南へ拡大していたことが図3で確認できる。その中に、撫順地区で初めての片廊下式、陸屋根の2階と3階建てのモダンな住棟12棟が現存している。筆者らの現地調査では、現住民の房屋所有権証を確認したところ、1930年や1934年に建設されたと記されていた。

図3では、1926年になかった公共施設、小学校、



図3 1936年頃の新屯(参考文献3附図)・筆者加筆

新屯公園、療養所なども建設されたと分かる。新屯公園の面積は390,967㎡(約39ha)¹³で、当時の撫順では最大規模の公園である。大都市から新屯公園まで電車で通行でき、山野の趣があると共に近代的な設備が完備されていることから、1933年に奉天の小学生の夏遠足の第一候補地になっていた¹⁴。

3. 炭坑町の住宅地計画と住棟の特徴

3-1 新屯日本人住宅地の計画

満鉄は創立初期には、ロシア人が残した住宅を日本人用社宅に転用したが、1908年に各満鉄附属地を対象とした都市計画を策定し、それと共に住宅地の計画と建設も行われていた。

満鉄の社宅地に関しては、包慕萍ほか「30年代瀋陽満鉄社宅的現代主義規畫」、「瀋陽満鉄社宅的空間構成」¹⁵、沙永傑ほか「近代大連城市住宅類型的集合化演進過程」¹⁶などの既往研究があるが、これらの研究対象は満鉄の中核都市であり、戸建て住宅や集合住宅の個別事例に集中している。本小節では撫順に現存している日本人住宅の事例から満鉄における住宅地計画や住宅類型の変遷を明らかにすることが目的である。

2012年に筆者らは撫順市の東郊外の新屯に戦前の日本人住宅街が丸ごと現存することを発見し、新屯西街に現存する計5タイプの住宅を実測した。また、2013年に新屯東街の住宅地や撫順市中心市街地の労働公園周辺及び東富平路(共に永安台)に現存する旧日本人住宅を調査し、4タイプの住宅を実測した。

2012、2013年の現地調査での聞き取り調査及び文献と照合して、当時の新屯住宅地の全体配置図を復元することができた(図4)。そこから、1936年の地図と比較して、住宅地はさらに南側と河東地区へ広がっていたことが判明できた。『炭礦読本』(1936年度)では、昭和10年度に新築した新屯社宅では、独立暖房式を採用したと記されており、新屯西街の南地区は、同種の暖房形式であることから¹⁷、この地区は1935年度に建設されたと思われる。このように、新屯西街地区においては、1920年代初めから1930年代まで、住宅地が北から南へ拡張され、時代によって、住宅の平面構成から住棟形式、内部仕上げまで変化が見られる。住戸類型は5種類あり、最小の4.5+6畳の間取りの住棟数が一番多い。面積は小さいものの、玄関や窓、物置に造りつけ棚を造作するなど、設計に斬新さがあり完成度が高い。

新屯西街では、社宅クラブと保健所及び共同浴場が住宅地のほぼ中央に設けられ、住宅地の活動拠点として機能したようである。住棟の前後の空き地には、緑地や児童の遊具が設置されていた。

一方、新屯東街の現在の住民の房屋所有権証によれば、この地区は1939年に建設された。この住棟も並列しているが、中庭を中心に前後住棟の住戸間取りが対称形に配置されていることから、中庭を核に室外空間を配

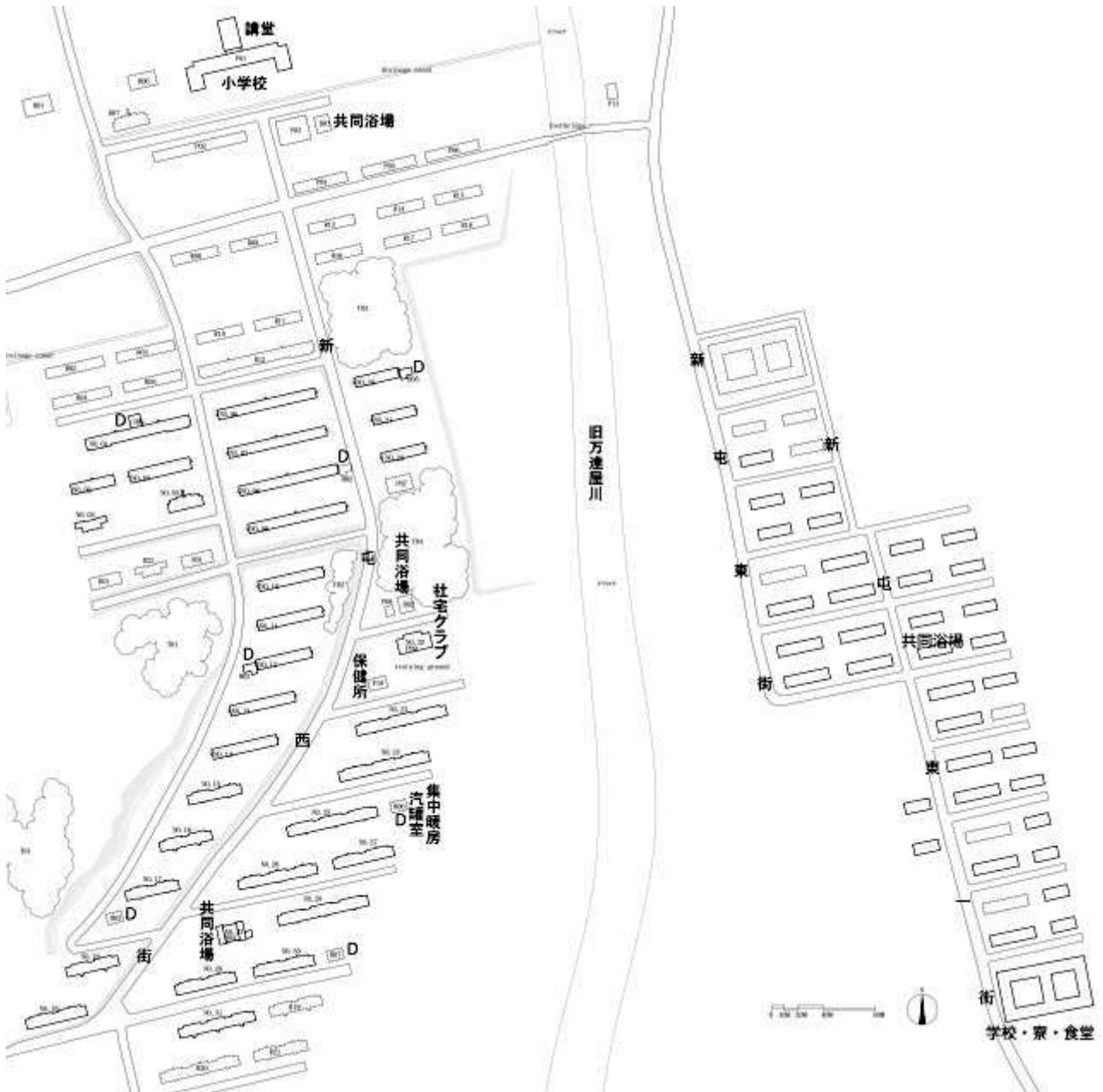


図4 新屯西街、東街復元配置図
(包慕萍など実測・作成、2013年)

置した、他の住宅地に見られない手法を採用している。また、新屯東街でも集中暖房で採暖していた。

3-2 採炭労働者住居地の計画

それぞれの炭坑付近に位置する採炭労働者（主に中国人）の住宅地では、労働者は殆ど独身であるため、合宿舎が住宅として提供された。その宿舎は一般に間口10間、奥行3間半あるいは4間半の赤煉瓦か黒煉瓦建の平屋で、一棟の収容人員は60から70人が標準であった。中国人管理者の大把頭¹⁸、小把頭の宿舎は別に一棟が充てられていた。暖房設備は満洲伝統的民家のカン

(炕)を使用する。古城子¹⁹露天掘り附属の5棟のみ木造2階建、間口36間、奥行3間半にして400人を収容し、かつ、ここだけは蒸気暖房設備が設置された。何れも電灯、水道設備を備えていた。

なお、昭和元年までに興業会社による買収家屋を除いて、採炭中国人労働者宿舎は合計280棟あり、最も多いのは大山坑の57棟、次に楊柏堡の53棟、東郷坑の52棟、他は凡そ20棟前後で、新屯のものは煉瓦平屋で23棟ある²⁰。これらの宿舎は長屋形式で、並列に配置されていた。

効率向上のため、労働者向けに各炭坑には満鉄直営の



食堂が設けられていた。採炭所建物の一部を売店に貸すこともあり、また、把頭が別に売店を建設することもあった。各坑の宿舎の一部に別室を設けて娯楽室にした。また、炭坑とは離れた永安台市街地に、1925年度に中国人労働者の娯楽施設の一つとして歓楽園を設置する計画が立てられ、敷地 35,000 坪の中に、中国人が崇敬する老君廟を建立し、興行物、妓館、飲食店などが設けられた。昭和元年度に、第二期施設を建設した²¹。

結び

満鉄附属地の市街地の立地と発展形態は、従来の中国人町との位置関係によってその性質が異なる。つまり、小集落から出発した大連や旧満洲の中核都市である奉天の事例²²と異なり、近代撫順は第三のパターンになる。即ち、県城所在地を基に発展し、満鉄により一元的に管理された大連の都市空間構造や中国人街、日本人街以外に、西洋人が多く住む商埠地もある奉天の多元化都市空間構造と異なり、中国人街と満鉄が管理する附属地市街地と炭坑町の二元化する都市構造を持つことが特徴である。

行政や経済の中心地である大連や奉天（現瀋陽）の満鉄社宅地では、戸建て住宅がメインである。炭鉱都市の撫順でも、行政中心区の永安台ではやはり戸建て住宅が多い。しかし、生産地の炭坑町では、下級社員が多いため、丁や丙級の社宅が多く建設する条件の中で、住棟形式をアパートメントにして、陸屋根やコンクリート・スラブの床を使用し、和室をフローリング式に変更できるような床の設計など、経済的かつモダンな設計手法が開発された。また、住宅地内に学校や公園、クラブ、消費組合を設け、近隣住区と似た計画手法が見られた。したがって、満鉄の社宅建設における新屯社宅地の計画手法と住棟設計の前衛性がうかがえる。

特に、炭坑町は中国人労働者や日本人の下級満鉄社員を対象に造られた町であるため、高級な戸建住宅より、連棟住宅や集合住宅がとりわけ早い時期に建設され、中国や日本の近代都市住宅史において重要な意味を持っており、今後の検討課題としたい。

追記

本稿は包慕萍、大場修ほか「近代撫順における満鉄社宅街—撫順炭鉱住宅に関する研究 その 1」（『日本建築学会大会学術講演梗概集 2013』2013 年、pp. 475-476）及び包慕萍、大場 修ほか「新屯から見た満鉄の炭坑町住宅地の計画—撫順炭鉱住宅に関する研究 その 3」（2014 年度日本建築学会大会（近畿）学術講演会、2014 年、pp. 525-526）をベースに新たな考えを加

え加筆、修正したものである。また、本稿の内容の一部については、神奈川大学非文字資料研究センターの租界・居留地研究会（2021 年 6 月 19 日）にて口頭報告した。

【参考文献】

- 1 南満洲鉄道株式会社編『南満洲鉄道株式会社十年史』大正 8（1919）年、大連。
- 2 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』昭和 3（1928）年、大連。
- 3 南満洲鉄道株式会社編『南満洲鉄道株式会社第三次十年史』昭和 13（1938）年、大連。
- 4 南満洲鉄道株式会社撫順炭礦編『炭礦読本』昭和 12（1937）年、撫順。
- 5 包慕萍『瀋陽近代建築の演変と特徴 1858-1948 年』同済大学修士論文、1994 年。
- 6 包慕萍ほか「30 年代瀋陽満鉄社宅の現代規劃」『第 5 次中国近代建築史研究討論会論文集』1998 年、北京：中国建筑工業出版社。
- 7 包慕萍ほか「瀋陽満鉄社宅の空間構成」『瀋陽建築工程学院学報』Vol. 13, No. 3, 1997 年。
- 8 頼徳霖、包慕萍ほか『中国近代建築史』第 4 巻、2016 年、北京：中国建筑工業出版社。

【注】

- 1 「新撫順の市街計画と其の建築」『滿洲建築協会雑誌』第 13 巻第 4 号、昭和 8 年、p. 6。
- 2 越沢明「撫順都市計画 1905~1945 年—ある植民都市の計画と建設」上巻 日本地域開発センター『地域開発』266 号、pp. 40-55、1986 年、「同」下巻『同』267 号、pp. 24-43、1986 年。池上重康、角哲ほか「南満洲鉄道株式会社撫順炭礦千金寨新市街の形成」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』2012 年、pp. 105-106、同「南満洲鉄道株式会社撫順炭礦千金寨新市街の福利施設」『同』pp. 107-108。
- 3 前掲注 1、pp. 2-3。
- 4 『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』p. 609。
- 5 歴史上で苦力、華工、工人など異なる称呼があった。
- 6 前掲注 4、pp. 573-574。
- 7 前掲注 4、pp. 576-577。
- 8 『炭礦読本』p. 462。
- 9 前掲注 4、pp. 651-652。
- 10 『南満洲鉄道株式会社二十年略史』pp. 185-186。
- 11 関東庁告示第四百四十八号、昭和 3 年官報第 577 号。
- 12 葛原尚「負けてたまるか—埋もれた小さな昭和史」2002 年、文芸社。
- 13 『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、1977 年、p. 1002、龍溪書舎。
- 14 『新屯聚落要録』満鉄地方部学務課編『研究要報』第 2 輯、昭和 9 年、大連。
- 15 包慕萍『瀋陽近代建築の演変と特徴 1858-1948 年』、包慕萍ほか「30 年代瀋陽満鉄社宅の現代規劃」pp. 114-124、包慕萍ほか「瀋陽満鉄社宅の空間構成」pp. 231-236。
- 16 沙永傑ほか「近代大連城市住宅類型的集合化演進過程」『第 5 次中国近代建築史研究討論会論文集』1998 年、pp. 107-113、中国建筑工業出版社。
- 17 前掲注 8、p. 462。
- 18 把頭 「把頭」とは人夫頭のことであり、鉱夫の募集・監督を行う。詳細は、松村高夫『15 年戦争期における撫順炭鉱の労働史』（上）（三田学会雑誌、慶應義塾経済学会、2000、pp. 41-69）を参照されたい。
- 19 古城子 炭坑の名称である。撫順では十数カ所の炭坑がある。
- 20 前掲注 10、pp. 188-189。
- 21 前掲注 4、p. 643。できた歓楽園の敷地は 35,000 坪より小さい。
- 22 前掲注 15 の内容を参照されたい。